



ウォルター・ウエストン と南アルプス



日本アルプスを広く海外に紹介し、日本山岳会の設立に尽力した、英国人宣教師ウォルター・ウエストンは、三度の来日中、富士山や日本アルプス等に数多く登山をし、その記録を講演したり、新聞、書物により日本の山岳の魅力を余すことなく広く世界に紹介しました。南アルプスも何度も登り、山梨県の風土・景観を愛し、その情景や人々とのふれあいを広く紀行記で紹介しています。

ウエストンと北アルプスには有名であるが南アルプスの関わりは以外に知られていないのではないかと。本年はウエストンが北岳に登頂して百年目を迎える。また芦安村はウエストンを南アルプスの開祖の一人としてトリーフで顕彰している。新しい世紀を迎えこれを機に改めてウエストンの足跡を追い彼が紹介した南アルプスの魅力を再認識し、芦安の活性化を考えてみたい。

ウエストンは一八六一年イギリスダービーで生まれ、ケンブリッジ大学卒業後、神学校を経て八八年に牧師として来日。九〇〜九四年の間に富士山四回、南アルプスの赤石岳、槍ヶ岳や乗鞍岳等多くの北アルプスに登山。

二度目の来日は、一九〇二〜〇五年であるがこの間あこがれの南アルプスに登山。
〇二年に富士山、北岳。〇三年に甲斐駒ヶ岳。〇四年に金峰山、鳳凰三山、北岳、間ノ岳、仙丈ヶ岳、富士山、ハヶ岳と山梨県の主立った山に足跡を残した。

一年から一五年まで三度目の来日をし、富士山や多くの北アルプスに登山。

一八年「極東の遊歩場」を出版。二〇年モナコで講演。日本アルプスを紹介。三七年 日本政府から勳四等瑞宝章授与。上高地にトリーフ完成。

四〇年 ロンドンで逝去。七九才。八九年 広河原に、名取運一、天野久と共にトリーフ完成。

「日本アルプス」という言葉は、一八八一年、当時日本造幣局の顧問 ウィリアム・カウランド教授がマリィ社から発行した日本便覧の中で使ったが、ガラウントは、自分が使ったことも忘れていた。九一年ウエストンが北アルプスを登山し探検記や講演で積極的に日本アルプスを使い、その後、南アルプスという名称はウエストンが使い、広く知れ渡るようになったのである。



甲斐ヶ根登攀（一九〇二年八月）

二度目の来日で横浜の聖アンデル教会の牧師をしていたウエストンは、八月一八日から、まだ鳥沢までしか開通していなかった中央線で来県。甲斐ヶ根（北岳）登山に一〇日間を要した。この間、案内を努めた、芦安村の三人のガイドと名取運一村長には、心底感謝し、その後登山ではいつも芦安のガイドと一緒にである。ウエストンの紀行記によれば、

一八日 横浜から中央線で終点の鳥沢へ、猿橋が絵のように美しい谷を渡り、

深い谷底には桂川の水が流れている。笹子を馬車と徒歩で越え、古代ギリシヤの円形競技場を大きくしたような甲府盆地を横断して甲府へ、後にウエストンは甲府は中央線で六時間で行ける町で日本でも大変美しく、非常に豊で、発展しつつある山梨県の首都である。ワインや月の華が有名な、全ての地方都市の中で最も興味のある町である」と言っている。芦安村では、村長名取運一の全面的な協力のもとに正雄一九才、清水長吉四四才、清水弥十郎六一才の三人の案内人や食料を手配。

一一日 芦安を六時半に出発。背負子に荷を着け、杖立峠から鳳凰の主稜線を越えて野呂川に降りた。標高一二〇〇の地点で野呂川を徒渉して右岸に渡る。それから四時間の苦闘の末、高度四〇〇の野呂川をさかのぼり、杉と樺の樹皮で出来た、広河原小屋にたどり着いた。木こりや猟師が使っている小屋で、目の粗いむしろとカモシカの毛皮一枚、それに檜の樹皮を使ってベッドを作った。途中釣り師から買ったマス一〇尾を焼いて食べた。非常に美味しかったが夜は蚤に悩まされたという。

翌日は休息日とし、マスを捕り食料とした。二〇〇グラム位のヤマモ沢山いた。野生の木イチヂクをデザートとした。ウエストンは服のほろびを繕い本を読み、ものを書き、水浴びをして一日を過ごした。翌朝四時に起こすように長吉に言い就寝。

翌朝長吉が朝食を作って申し訳なきそつに起こしたのは、真つ暗の二時四五分だった。正雄と長吉を連れ四時四〇分登山開始。野呂川の河床から続く大樺

と呼ばれる深い峡谷が、甲斐ヶ根山の心臓部まで入り込んでいるのがはつきりと見える。

その深い峡谷の下半分には無数の雪渓が見える。上部は巨大な絶壁となりその上の三角形の頂点が目的の山である。鬱蒼と茂る森林、その向こうに雪渓の輝きと重厚な岸壁、この眺めは実に雄大だ。雪渓、絶壁に続くこの峡谷を登れないかと聞くと、聞くだけ野暮という顔。大樺沢の途中から斜面に取り付き途中、三〇年ほど前に名取直衛（運一の父）が建造した甲斐ヶ根神社の前宮の倒壊跡に出た。

九時に森林限界を出て、巨大なハイマツを越えて一一時丁度に頂上に到着。頂上付近にはミヤマオダマキと、ミヤマキンバイが沢山咲いていた。頂上のケルンとケルンの中に小さな祠が崩れていた。そこに登頂の記録を残し一一時三〇分下山。

北尾根を三〇分下ったところで雷鳥六羽を捕獲食料に追加。しかし霧に巻かれて方向を見失う。朝は困難だといった大樺沢を降りることも出来そうだと思いつくか緩やかな傾斜の地点まで降りた。

次の四時間の下りは、日本で経験した登攀の内最も困難なもので、それは、マッターホルンの肩部から下のアイス小屋まで降りる道に匹敵する。

雪渓に出ると素晴らしいゲリセードを楽しんだが、ガイドの二人はガリーの脇を降りた。

しかし日暮れと共に疲れもあり危険なため大樺沢脇の大岩の陰でヒークする事にした。正雄は下まで一時間ぐらいたると広河原小屋に連絡に行かせた。

長吉はハノキの枝を使い風よけを作り木の葉を重ねベッドを作った。彼とは

その後何度かビバークを共にしたが、この大榎谷の壮大な静寂の中で過ごした。

前ページより

次ページへ続く

夜こそ、深い仲間意識を作り上げた。彼が絶えず献身的に尽くしてくれたことは、素晴らしき思い出となった。

朝食を済ます頃正雄が顔を出す。

七時に野営地を出発。八時半に広河原小屋に到着。沐浴、睡眠、釣りに読書で一日を過ごした。翌日一時間かかって芦安村に着いた。名取さん夫妻と五人の子供の写真を撮り、丁寧な挨拶の合唱の中を別れた。正午丁度、雑踏のしかし絵のように美しい環境の中にある鯉沢の粉屋という宿に着いた。名取さんの紹介状もあり美味しい鯉料理や豪華な日本料理をこちそつになつた。

一七日 四時一五分起床。貸し切り船下り代五円を支払い出発。正雄と長吉が船着き場まで送り、気を付けていくよつ求めた。この気配りは胸に染みだす右に出る物がない誠実さと心遣いで仕えてくれたこの仲間と別れるのは、正直言っても寂しかった。

船出から六時間半で陸に上がり、一時には横浜行きの列車に乗って甲斐ヶ根登山が終了した。人里離れた、魅惑的な山奥において得られた初登頂の喜びと、自然はほとんど人の手に触れたことがなく、住民も珍しく文明に害されていない魅力的な芦安村であった。

奈良田越え(一九〇三年五月)

五月一日横浜から甲府へ泊し芦安へ咽ノ口という狭い岩の合道へ下ると村長が立てた岩見温泉という浴場があった。村長が公共のために尽くしている証

明である。ここは近隣の年寄りが保養に来る。奈良田峠へは呼吸も苦しく手足も疲れて、やっとの思いで登ったジグザグ道は、日本の山地でそれまで経験した最も急峻な道であった。尾根の付近で炭俵、厚板、下駄を作る小さい木片等を担いだ十人ほどの少女が姿を現した。下の方からは別の人達が重い荷を担ぎ、あえぎながら登ってくるのが見えた。その内のひとりは一六歳以上には見えないう肺結核にかかっているような感じの子供だったのでウエズトンが峠まで荷を背負ってあげた。か弱い栄養不足の若い人が四五kgもある荷を背負って山道を登るのはあまりにも重労働すぎると思った。芦安から八時間かかって奈良田に着いた。当時の芦安と奈良田の交流の状況がウエズトンの優しさと共に伝わ

甲斐駒ヶ岳登山(一九〇三年八月)

八月中旬 台ヶ原から甲斐駒ヶ岳に登山。美しい森や林が様々な変化を見せて、素晴らしい所を嘗々と五時間歩いて屏風岩の休憩小屋に付く。途中金色の百合に混じって濃いピンクからクリーム色だった白までのシヤクナゲが咲きナナカマドの葉が朱色に染まっていた。屏風岩の険しい岩場には登路の助けに梯子と鎖が用意されていた。頂上からの展望は大変大で美しい。明るく甲府盆地のはるか彼方には、富士の紫色の山容が太平洋岸から聳えている。樹木が鬱蒼と茂った眼前の鞍部から鳳凰山のオベリスクがそそり立ち、それより高く、白根山の鍬状の尾根が聳え、さらに、その北には巨大なブオリユムを誇る仙丈ヶ岳がどっしりと座り、北西には北アルプスの山々が雪縞模様の峰を連ねている。周りの風景があまりにも素晴らしいので七

丈小屋にもう一泊し翌日山頂から黒川に下った。

鳳凰山、北岳、間の岳、仙丈ヶ岳登山(一九〇四年七月)

七月二日に南アルプス登山で訪れたときは、甲府盆地は水害のため櫛形方面を迂回して芦安村へ入った。山へのアプローチが困難で尖峰の挑発的な山容に刺激された鳳凰山を目指した。弘法大師でも登れなかったオベリスクに最初に登ることに成功した。同行した芦安のアイド達は、地蔵岳に最初に登頂した人だから、麓に地藏堂を建て、最初の神主になれと勧めたといふ。

広河原に下り御池に向かった。御池には芦安の人達が雨乞いをした池大神を祭った祠があった。草すべりを登って甲斐ヶ根の頂上へ出た。ここからは、本州の最も幅広い地域にある、全ての主な山脈及び高峰群が見える。

間の岳に行つて御池に下った。北沢峠の造林小屋に宿泊し、欧州人として初めて仙丈ヶ岳に登った。高山植物は豊富で種類も多かった。北沢峠で週末を過ごし高遠に下った。

百年前に近代登山の基礎づくりに貢献し、日本アルプスを愛し、芦安村のアイドを愛し、南アルプスと山梨の豊かな自然景観を広く世界に紹介し、南アルプスの黎明期を築いた、ウエズトンに改めて感謝と敬意を表すると共に、改めて南アルプスの感動を多くの人に体験していただきたいと思うのである。

(芦安ファンクラブ 仲田 公彦)

野呂川林道の開通

車で南アルプス登山の幕開け

野呂川の流域は、豊かな森林と盟主北岳を中心に白根三山、鳳凰三山、甲斐駒ヶ岳、仙丈ヶ岳など多くの三〇〇〇m級の峰を有する日本を代表する構造山地である。森林の利用については、今から三三〇年前江戸城の改築のため木曾の義助が鉄砲といわれる方法で木材を搬出した記録もあり、古くから野呂川流域には山仕事や釣りになどに入っていた。

明治二年には芦安村長名取直江は、北岳への登山道を開くための官許を得て明治四年（一八七一年）には独力で北岳頂上命斐ヶ根神社を建立。

中宮、前宮も建立したが登山者はなくウエントンが登山した明治三五年には朽ちていたといつ。しかし御池小屋の場所には雨乞いをするため岩の上に池大神を祀った祠があり、日照りの時雨乞いのため、芦安村の代表がこの鎮守様に祈願に來ていたといつ。

広河原や北沢峠にはこの頃木こりの小屋が有り、山仕事や猟師の人達が使っていた。これらの小屋が後の山小屋へと代わっていた。山梨県の特徴である。

また甲府盆地の西部の南アルプスを背にした御勅使川扇状地一帯は、「原七郷」といわれる。白根町、八田村の全域と櫛形町の一部を含めたこの地域は、扇状地特有の砂礫土の台地で地下水が低く、灌漑用水はもとより、飲料水にも事欠き「月夜でも焼ける」といわれた常習干ばつ地帯であった。

このため地域農民は、水飢饉を解消するためには、山一つ隔てた、野呂川の水を引く計画を立て寛政八年（一七九六年）市川代官所に野呂川開削、疎水計画を提出。許可を得て水利権の確保をしたが、夜叉神峠に四、五〇〇mの導水路を引くこと、下流の湿地地帯の甲西町等の理解が得られず実現は出来なかった。このため俗に実現の出来ない話を「野呂川ばなし」といわれるようになった。

しかし、昭和二六年山梨県知事となつた天野久は、野呂川の奥地に深く眠る水力、木材、観光などの豊富な未利用資源の開発を目的として、昭和二六年野呂川流域総合開発計画を立案。昭和二七年、「富める山梨」の実現を目標として野呂川総合開発がスタートした。計画の根幹は、早川流域の電源開発、野呂川林道の開設、原七郷地帯の上水道敷設と湿地地帯の土地改良であった。

電源開発は東京電力や日本軽金属が下流で発電していたが、山深い上流域での発電に挑んだ。川沿いに工用の道路を敷設し工事を行うのである。この道路は電源開発道路として早川町から、広河原まで延長され野呂川林道と接続された。現在では県道南アルプス公園線として一部未改良、未舗装部分を残し一般車両の通行も可能である。

また、発電事業のため原七郷の人達が持つ水利権を山梨県が取得するため、上水事業の敷設や土地改良事業が行われた。昭和四〇年代前半には「この発電量は県内のほとんどをまかなえるほどのものであり、上水道の整備、灌漑用水、土地改良事業のため、南アルプス山麓地域は県内有数の果樹地帯、野菜の生産

地となり豊かな田園地帯に変身した。

野呂川林道の建設工事は、二一七立方mの木材資源確保の目的で行ったがその地形、規模、事業量から当時我が国最大のみならず、その中心である夜叉神隧道（延長一、一四八m）は、当時林道トンネルとしては我が国最長のもので標高約1400mの高所を貫く山岳道路の建設工事としては一つのモデルケースでもあった。

昭和二七年七月着工、総延長二五km、総工費一〇億五、九〇〇万円を投じて昭和三七年一〇月、一〇年余の歳月を要して完成した。また、この林道の工事では一二名の尊い殉職者を数えた。

それらの人々への感謝と慰霊の碑が、野呂川林道を見渡せる鷹ノ巣山の展望台にたてられている。幾多の困難やフオツサツナの脆い岩との戦いであった林道工事を最後までやり遂げた工事関係者と天野久知事の強いリーダーシップで産業や観光に大きな効果を生み出す野呂川林道が開通したのである。

このため、芦安村は甲府盆地の角にある小さな村から、南アルプスの玄関口と脚光を浴びることになった。

昭和三九年には南アルプスは国立公園に指定され「白鳳溪谷」として多くの人に親しまれている。この林道開発は林業振興と共に南アルプスの登山者にとって従来、広河原まで一日かかった時間を、僅か一時間に短縮し、誰でも車で広河原まで行くことができるようになり、大衆登山の幕開けとなった。

さらに、広河原から長野県長谷村まで昭和四二年から野呂川上流にある三〇〇万立方mの森林開発を目的に森林開

発公園によって南アルプス林道として工事着手された。途中昭和四八年自然保護思想の高まる中、北沢峠部分の一九kmが工事中断となり、環境庁長官の裁断により五二年再開し五四年一月月完成した。五五年から、山梨長野両県に移管され維持管理を行っている。

また、広河原から先は環境省の指導でマイカーの乗り入れは規制されこの間は芦安村と長谷村の村営バスが往来し、南アルプスの登山は人々にとって身近なものになった。

現在四七万人もの南アルプス国立公園の利用者のほとんどが、この林道を利用して登山やハイキングに訪れている。懐が深く大きな峠や急流の河川を横断する林道開通前の状況を思うと、現在の中・高年登山やツアー登山など思いも寄らぬ光景である。

芦安ファンクラブ 仲田公彦

開山祭「蔓払い」イベント

の話

この度の「南アルプス開山祭」実行に向け企画の段階から気になっていたことがあった。

いかにして「開山」のイメージと「案内人」の功績を表現するか、解説なしで多くのこの地の由来を知らない人にアピール出来るか。

他の行事の模倣はいけない。この記念すべき新たな開山祭にふさわしい。そしてこれから毎年継続していける事ではないならばならない。

こんな思いをめぐらせていたときに、前記の登山教室のための旧道復活登山道整備に取り掛かることになった。長い間まったく歩かれていなかったその道らしきものは、少し日差しが射すような雑木林には、手に余るほどの藤蔓やグズ蔓が道を遮り、木々を縛り付けていた。当然道を整備するにはこの蔓を切ったり、跳ね除けなければならぬ。

何箇所もこんな作業を重ねるうちに、ジャングルの中をまがき進むインディーズのイメージと、北岳を開山した明治初期のパイオニア的先駆者の姿が重なった。

「これだ、これしかない。」この蔓を何とかパワーマシナ化してイベントに作り上げよう。

蔓を切る＝開山。案内人の使命感。こんな起案から幅を広げたのが、切った蔓の飛び跳ねる動きによる悪霊への威嚇、排除、山の清め。もちろん、この作業は当時の案内人の風体でなければ意味が無い。当時の案内人は相当堅牢なものであった。

足はしらえは、まずわらじ、わらじがけ、はばき。衣類は、からさん、かつらぎのシャツ、てぬぐい、やまばんでん等で身を固め、装備としては背負子、油紙（レインウェア）、杖、かんじき、尻皮、腰なた、みの、すげかさ等があげられる。

復元作業に精力的な観光協会や地区のおばちゃん汗の結晶は、本番当日の瞬間に新しい村の伝統としてよみがえる事だろう。

「蔓払い」イメージ図

時を越えて今

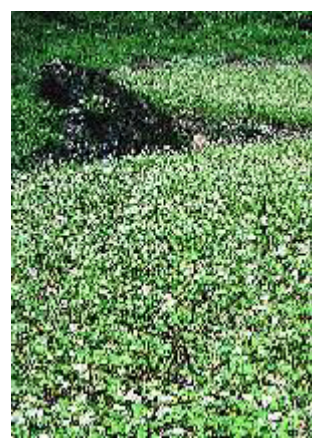
黄金千両

芦安村へ入りししばらく坂道を登っていくと、大曾利久保集落がある。昔、ここに山大尽の長者が広い屋敷を作って住んでいた。そこからは芦安の集落が一望のもとに見渡せ、真ん中を流れる御勅使川と両岸にせまる山々とか、屋敷の庭とつまく溶け合ってそれは素晴らしい眺めであった。

長者は少し太った丸顔の優しい人で、村人からも大変慕われていた。長者は大勢の村人を雇い、長者自らもよく働き集落全体は活気に満ちていた。

ある夜のこと。長者は池に映る日日月を眺めながら、もうすぐ一五歳になることとしているひとり息子のことを考えていた。息持ちは優しく、息子なのだが、病弱で甘やかしてしまっただせいか、どうも少し頼りない。「この先、自分の後を継いで立派にやってくれるだろうか。」「そんな事を思い庭の岩に目をやると、ふと、こんな事を思いだ。そう、自分、自分が起こしても心配の無いように、お金や漆をこの庭に埋めておこう。」

あくる日、皆がすっかり寝静まった真夜中。長者は忠実な召使い数人と一緒に、沢山のお金と漆を樽に詰めて木の下にひそかに埋めた。この先何十年経つとも、おそらく位置が変わらないであろう大岩のいくつかを目印にして...



大岩が点在するそば畑

くなつてしまつた。今はただ畑の中に大岩だけが残されている。あの黄金や漆はとうなつたのだろうか。今となつては、ここに居るのが、長者の子孫が使つてしまつたが、誰にも分からない。ただ、次の歌だけが今も村人に語り継がれている。

朝日さす 夕日輝く木の下に
黄金千両漆満杯

編集後記
水をなみなみと貯めた田んぼに囲まれた我が家では、夜半までかえるの大合唱が耳をつく。ときおり物音を感じたらしい一瞬の静寂。やがて一匹の鳴き声が他を誘い、何事も無かつたようにまた始まる。

ふと、幼かつた我が子がつぶやいた言葉を思い出す。どうさん、一番先に鳴き出すかえるって、勇気あるんだよね。子供心が感じた「かえる」の勇気だった。静寂からの一声を発するのは、人間だつて大変なことだよ。

芦安ファンクラブも小さな勇気を持つて手探りの静寂へ呼びかけたい。
(清水記)

子ども達と一緒に歩いた山で感じたこと 手塚秀美

私が現在勤務している山村留学施設「チロロ学園」では毎年夏に登山を行います。今年度は二人の女の子、その家族を含め、総勢十一名で仙丈ヶ岳へ行ってきました。

チロロ学園は、寮型の施設です。ここで集団生活を行い芦安村の学校へ通学します。この学校までの道が山を歩くのもってこのトリーニザコースとなります。行きは下り坂なのでよいのですが、帰りは「頭がいたい。迎えに来て。」と仮病を使いたくなるような辛い道のりとなります。

この女の子達は登る前、仙丈ヶ岳登山に不服な様子でした。一人は昨年登った北岳がいい。『あとの一人は』山はヤマダ、ヤマダ。』と歩くこと、山に行くことに何の楽しみも持っていない。しかし本人の意思とは裏腹に靴やザック、雨具と必要なものは着々と用意されていきます。そんなこんなで夢も希望も持たず、不安を抱えながら仙丈ヶ岳へ出発しました。

行きたくもないところに無理やり連れられて行かれる訳なので子どもはずっとわがママを言い続け、汗として出るべき水分が涙となりながら、一歩一歩進みます。周りの大人はおだてたり、叱ったり、お尻を押して宿泊先を目指します。やっと辿り着いた山小屋。子供も大人もすっかり疲れ、ぐっすりと眠っていました。夜中に見上げた空は、満天の星でした。

二日目を迎えても、依然として子供の気持ちは晴れません。頂上まであと三十分。あの頂からは何が見えるんだろうという期待感ではなく、もう降りたい気持ちが先走っていました。ついに頂きに立ちました。天気に恵まれ、北岳と富士山が並んで見えます。『ああもう登らなくていいんだ』と言つ安堵感からか、子供の表情に笑顔が見られ、足取りもずい分軽くなりました。長い長い下りの道程を終え、無事にチロロ学園に到着することができました。子供の表情は、目標を達成できた満足感に浸り、自信に満ちたたくましい笑顔のようになっています。

といつのが大人から見た子供達の様子ですが、実際の子供の気持ちはどんなんでしょうか。辛い辛い思い出となるのかしら。同じ時間、同じ目的地、同じ物を見ても感じることは人それぞれでしょう。山に登ることでこうして得られたものは何なのだろう。下山して一服している登山者の中を覗き見てみたら面白だろうなあと感じました。ともあれ、この体験が子供達の心の肥になつて、大きな実を結ぶことを願います。